

# 病厄除け 幸護神 愛しのスポット探訪 廣田神社



青森市を中心部にある廣田神社は以前から気になる存在だった。中世までは国の境界として認識されていて、北海道は異境の地であった。そのような青森の地に祭る神として主祭神の天照大御神荒御神が祭祀されていた。いついこの神はどのような神か。この神を論じるには別に相当な論文が必要で、今回の記事で紹介するのは触りに過ぎないことをお断りしておく。そこで伊勢神宮のHPで荒祭宮をみると次のように書かれている。

伊勢の皇大神宮は、皇室の御祖神であり日本人の大御祖神である天照大御神をお祀りしている。荒祭宮は、内宮に所屬する十別宮のうち、第一に位し、殿舎の規模も他の別宮よりも大きく、正宮に次ぐ大きさで神様の御魂のおだやかな働きを、「和御魂」といい、荒々しく格別に顯著な神威をあらわ

される御魂の働きを、「荒御魂」という。

天照大御神荒御神は、またの名を撞賢木巖之御魂天疎向津媛命といわれる長い神名をもつていて。『日本書紀』神功皇后撰政前記に「神風の伊勢國の百伝ふ度逢縣の拆鈴五十鈴宮(後の伊勢神宮)に所居す神、名は撞賢木巖之御魂天疎向津媛命」とある女神で、天照大御神の荒御魂(荒ぶる勇猛な魂)のことである。荒祭宮は、かつては正宮に位置していたと思われる。伊勢神宮公式の由緒書きの瀧原と瀧原宮の項で、「その御魂をこの神である天照大神宮に天照大神を奉祀する姿の古い形と言われています」つまり、現在は別宮の同別宮に天照大神の荒御魂を奉祀する姿の古い形と言われています。

「つまり、現在は別宮の第一位の神に位置しているが、以前は両神を並べて祭っていたと述べているのだ。



『名高百勇伝』「神功皇后」歌川国芳 作  
出典：ウィキメディア・コモンズ

「日本書紀」「古事記」によれば、第14代仲哀天皇が熊襲征討のために筑紫におもむいたが途中神懸かり、「先に宝の山ともいすべき、新羅を討つべし」との託宣があつた。神功皇后は改めて斎宮を設け、審神者を立て自らが神主となりこの神の神名を尋ねると、名は撞賢木巖之御魂天疎向津媛命と答えた。仲哀天皇はそのような国は見えないと神託を疑い、予定通り熊襲を攻めることにしたが、この神の神罰によつて突然、筑紫で没した。神功皇后は仲哀天皇のあとをうけ、のちの応神天皇を懷妊したまま新羅にみづから遠征し、百濟、高句麗を帰服させたという。(三韓征討)

凱旋後、応神天皇を生み、帰りに紀伊から難波へ船を進めようとしたが船が思うように進まなかつた。皇后が神にお伺いを立てるとき、天照大御神が応え「我が荒魂は皇居の近くに置くべきでない。廣田国におくとよい」との神託があつた。この時の神社が兵庫県西宮市にある「廣田神社」であり、撞賢木巖之御魂天疎向津媛命を「天照大御神之荒御魂」として祀っている。式内社（名神大社）、二十二社の一社で特別の神社である。

廣田神社のHPには下記のように皇室の見解が載せられており、天照大神をお祭している実態が理解できる。

一大正14年に時の皇后陛下が、全国の官国弊社に御奉納遊ばされたる「神ながらの道」の一節に「伊勢神宮の内宮様の御本宮には天照大御神様、即ち和魂の神様をお祀り申し上げてござります」又一節に「荒魂とは和魂を『実現する魂』でございます」

「宮中の賢所は、応神天皇の御時から天照大御神様として和魂のみを御祀り申し上げ、之に応じ給う荒魂は摂津の官幣大社廣田神社に御祀り申し上げてござります」と記されたるを見ても、如何に尊貴の大神なるかを窺ひ知るに足る。」

荒魂についてより抜粋

廣田神社略記からの引用だが、宮中の賢所は、天照大御神様として和魂のみを、荒魂は摂津の官幣大社廣田神社に御祀りしてて一对のものであると述べているのだ。伊勢神宮の由緒も古くは天照大御神と天照大御神荒御神は対で正宮として祀っていたといい、伊勢神宮HPも廣田神社HPもどちらも同じ内容を載せているのである。

(P106へ続く)

## ◆廣田神社 厄除けの歴史

神社誌編輯誌料に天明四年(1784)の大凶作のとき、領内で疫病が流行し、病死するものが多かった。体香院様聞召され、江戸表より右疫病除けとして箱入り御札一通、白木造御祀御弓二張、御矢二具を時の代官であった笠森権蔵・佐藤忠太夫の両名宛に送付、外ヶ浜の産土神に奉安して息災を祈れと仰せ付けられ、廣田神社に安置奉祀したところ、ようやく病魔は退散することができたという。以来、夷の社は疫病者の守護神として、大いに崇敬を集めようになつたという。『青森市史10社寺編』

この青森市史の記述に加えて後半のページ(P106~P108)に載る、瀬織津姫の祓の神としての神佑というか、女神の力によるものではなかろうか。